

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (四〇)

第五六則 密師白兔

〔示衆〕

衆に示して云く、寧ろ永劫に沈淪むべくとも、諸聖の解脱を求めず。提婆達多は無間獄の中にて三禪の樂を受け、鬱頭藍弗は有頂天の上にて飛狸の身に墮つ。且道、利害は甚麼の処に在りや？

〔本則〕

拳す、密師伯と洞山と行く次、白兔子の面前に走り過ぐるを見て、密云く、「俊なるかな！」と（荒草裏に走るを争奈んせん）。山云く、「作麼生？」（你が遅きことを怪む）。密云く、「白衣にて相と拝さるるが如し」（地自り空に昇ることは易し）。山云く、「老老大大く這箇な語話を作つて」（幾く放過ところ）。密云く、「爾は又い作麼生？」（人に虎を害する心なければ、虎も人を傷つくる意なし）。山云く、「積代の簪纓、暫時は落薄れり」（空より放下すことは難し）。



タイトルの「密師」とは、洞山良价禅師の兄弟子とされる神山僧密のことです。生没年などは不明ですが、洞山とともに雲巖曇晟の法を嗣ぎ、のちに湖南省の省都である長沙の近くにある神山の道場で活躍した人です。ただ、神山での活躍もさることながら、若き日に洞山と一緒に長らく諸方を行脚して禅匠たちを訪ね歩いた際の、すばらしい機縁が一〇以上も伝存しているのが特徴です。

この「密師白兔」もその一つですが、タイトルこそ「密師」ではあっても、内容的には洞山のすばらしさを示すものです。『従容録』には洞山が主人公の本則が五つほどあり、すでに第九四則「洞山不安」、第四九則「洞山供真」、第九八則「洞山常切」、の計三則を拝読しています。これらのほかにも、今回のように洞山がその真価を発揮している則があるのですね。

洞山さまについては、もう何度も紹介済みですから、ここでは臨済と並ぶ唐代きつての禅匠、とだけ申しておくとどめます。まず、万松さんの「示衆」をみましょう。もつとも分かりやすい意識です。

仏たちのたすけを求めるよりは、永劫に沈みこんだ方がよいかも知れぬ。ダイバは無間地獄で三禪天の楽しみを受け、ウダラカ仙人は天上界に上りながら山ネコの身に堕ちたというじゃないか。サア、こうなると利害得失はどっちにあるか、わかるかな？

こんなところ。ダイバダッタは釈尊のイトコで阿難の兄。出家して仏弟子となったが、後に背いて釈尊を何度も殺害しようとした罪で、生きながら無間地獄に堕ちた。しかし修行の功德により三禪天の快樂があつたといわれます。ウダラカ仙人は神通力があつて王宮に出入し、王妃の手に触れて通力を失った。努力して天上界に生れ変わったが、寿命が尽きて下界に生れ山ネコの身になり悪道に堕ちた、といわれます。見これはエラく不条理な話に思われますが、万松の趣旨は、悟つていれば地獄でも安楽の境、贅沢三昧の金持でも心が腐つていれば苦悩の境、さあどちらがよいのかな、という深い宗教的価値判断を追っているのです。その評価の源泉こそ次の公案！

僧密と洞山が行脚の時、白兔がサツと前を横切った。僧密「すばやいなア。」洞山「どこがです。」密「無位無官の者が総理になつたようだからさ。」洞「年甲斐もな

くそんな事を言つて。」「ぢやあ君はどうなんだい？」「先祖累代の高官でも、しばらくは落ちぶれですね。」

この〔本則〕は、すでに原文の読み下しで思いきり意識したルビを振っていますから、表面上の意味はもう明瞭でしょう。あえて難語といえ、〔白衣〕は在家、「老老大」は俗語で「いい年をして」の意味、「積代の簪纓」は先祖代々エライ飾りをつけた人、つまり公家や高官の類です。問題は何か何にたとえられ、その深い宗教的意味は何か、です。



田圃を前に山を背にした現在の洞山寺

僧密が「すばやいな」と賛嘆したのは、兎の足にかけて禪の悟りはこのようにまつしぐらな「一超直入如来地」であるとの表現です。さらに洞山からその内容を聞かれて、庶民がサツと総理になつたようだ、とひたむきな向上の境地をのべた。ところが洞山は、代々の高官も落ちるのが大切と、逆に向下のはたらしきの重要さをのべたのです。

つまり、仏道に生きる目的は、上求菩提を目ざすと同時に、下化衆生のはたらきをなすことであります。言いかえると、知慧を身につけると共に慈悲の実践です。こうした大乘仏教のすばらしきあり方を、僧密と洞山の両者は兎が面前を横切つたという日常茶飯事の体験を通じて、みごとに確かめ合つたのです。ふり返つて、私は仏道を歩むなどというのは余りにもかけ離れた破戒無慚な者ですが、それでも青年期には良き道友から多くの啓発や刺戟を受け、今にして感謝しています。今日はまた別の意味で直接間接を問わず、多くの方々や団体から限らない慈愛と啓発の連続であります。つまり、自分が今ここに何とかあるのは、広い意味での道友の方々によるお陰と感謝感恩の昨今、この拙稿も自分が書いているのではなく、道友からの贈り物です。

《特集》 — 発足三五周年記念 — 心に沁みた報恩一夜接心と第二四回成道会円成す

毎年一二月は、年中行事として成道会が行われていますが、今回は参禅会発足三五周年



を記念して、成道会の前日に、お釈迦様に感謝する報恩一夜接心を行うこととしました。

報恩一夜接心は、一二月二日、午後二時から翌三日の八時三〇分まで。二三名の会員が集い、二日間にわたって五炷の坐禪を肅々と行いました。

一炷が終った後、椎名老師より「証悟戒行法語」をテキストとした禪講を賜りました。以下に禪講の要旨を記述いたします。

「証悟戒行法語」のような短い文章で教え示したものを法語といいます。この法語は、道元禪師が、当時の大檀越であった波多野義重氏の依頼によって、鎌倉に赴いたおりに、おそらく出家者と思われる者に授けたものだと思います。本當の悟りというのは、戒律を通して生活の上に現れ出るものであり、生活の上に現れない戒律は駄目である。だからこそ、退くということがない仏向上の歩みが、何にも増して大切であるという教えが、眼目となっています。

いつもながら椎名老師の講義は、様々な故事来歴や逸話を引用して、縦横無尽に説き示してくださるので大変理解しやすく、まことにありがたい限りです。

一二月に行う龍泉院での一夜接心は、当然ながら全参加者とも初体験です。寒さに対して少々の憂いをもっておりましたが、大悲殿や客間の暖房設備のおかげで、一人も体調を崩すことなく、無事大開静を迎えることができました。



袈裟を頂いて暁天の坐禪

第二四回成道会は、三日の午前九時からの二炷の報恩坐禪でスタートし、椎名老師のお導きのもとに、厳肅に

執り行なわれました。成道会への参加者は、参禅会員三七名、梅花講員一四名、合計五一名と大変盛況でした。

法要の始まる前には、龍泉院梅花講の皆様から、心に染み入るような成道会和讃が清らかに奉詠されました。

法要の後は、恒例となった「問答」です。今回はベテラン会員に伍して、当年に縁を結んだ新会員も積極的に参加し、熱気あふれる問答が展開されました。

その後、参禅二〇年に達した会員への表彰式が行われ、椎名老師より添田昌弘さんに、素晴らしい揮毫額が贈られました。

つづいて、椎名老師より成道会のご法話を賜りましたが、詳細は下段の「北国の玄奘三蔵」をご参照ください。

最後は、点心の時間です。椎名老師を中心にして、梅花講員と参禅会員が左右に居並んで、和気藹々の楽しいひとときとなりました。今年も松井隆さんに典座役を担っていただきました。前日の一夜接心を含め、全部で三食分のお料理を作ってくださいました。また松井さんのお手伝いとして、大坂晶子さん、美川恒子さん、石田七重さんにもご活躍いただきました。



典座役で大活躍の松井さんとお手伝いの方々

また、これも恒例となり、三町勲さんから素晴らしい石仏の写真額が寄贈され、

クジ引きによって五名の参加者に贈られました。椎名老師からは、今年も参加者全員に「永平寺カレンダー」とお供物を頂戴いたしました。

最後の締めくくりは、参加者全員による心の吐露です。

全員の発言に共通していたことは、三五周年の記念行事に参加できた喜び、梅花講員と参禅会員が合同で行ったことによる充実感、一年間無事に修行できたこと、来年への新たな決意といったことでした。

椎名老師は、常々、法要の意義として、参加者一人ひとりの琴線に触れることに腐心されておられます。今回の行事も、まさしく参加者全員にとって、心にしみる「報恩一夜接

心」であり、「第二四回成道会」であったと信じるものであります。

(記録・杉浦上太郎)

合掌

「北国の玄奘三蔵」

今年の法話は宗門の名僧、新潟の古範和尚のお話を頂きました。以下は椎名老師のお話の概略です。

「北国の玄奘三蔵」と言われている曹洞宗の古範和尚のお話を致します。玄奘三蔵は唐の時代にインドに行って、沢山のお経を持ち帰ってきたことで有名です。

古範和尚は明和二年、一七六五年、今から二四〇年前に、新潟県の今は魚沼市になっている小出で生まれた方です。

小出には曹洞宗の有名な雲洞庵という、越後の曹洞宗四大道場の一つがあります。古範和尚はその祥水和尚の下で出家得度しました。祥水和尚は偉い人で、特に漢詩の大家で、祥水和尚の漢詩の本が今でも沢山残っています。また、字が達筆で、草書が得意なんです。

古範和尚は雲洞庵で修行してから、越後川口のお寺の住職になりました。文化五年、一八〇八年です。四四歳の時、金沢市の大乗寺

に行き、徹通義介禪師の五〇〇回忌の大恩忌に焼香師を務めました。徹通義介さんは永平寺第三代の方で、その後大乘寺を開かれしました。再来年は七〇〇回忌になります。

文化六年、四五歳の時に長岡市の隣の与板町徳昌寺の第二六代の住職に招かれます。徳昌寺は雲水の修行寺として、別格の寺で、龍泉院と密接な関係があります。徳昌寺のある与板町は、信濃川の北側の岸に発達した町で、水運に恵まれた物資の集散地でした。与板藩がおかれていた城下町で、徳昌寺は丘の上にある古刹です。その境内には良寛さんの記念碑が建っています。

文政一一年に越後の大地震があり、三条を中心にして壊滅した家が一二〇〇戸、焼けてしまった家が一二〇〇戸、死者は一六〇〇名と大惨事になりました。藩主の井伊直経さんが藩内の亡くなった方の法要を、徳昌寺で大々的に営みました。良寛さんは近くに住んでおりましたから、それを称える詩を作っています。その記念碑が徳昌寺の庭の真ん中に立っています。

徳昌寺の近くで生まれた良寛さんのお父さんである以南さんは、出雲崎の山本家にお嫁さんに行きました。庄屋の新木家の出です。

良寛さんのお父さんの実家ですから、良寛さんも度々訪れております。そんな関係で菩提寺である徳昌寺にも、よく来ていたようです。

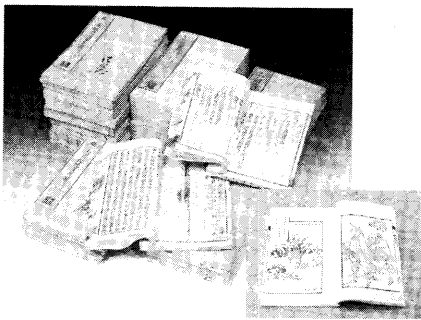
与板に三輪九右衛門さんの大きな別荘がありました。この方は越後きつての廻船問屋で豪商です。三輪さんの次男の左市さんが出家をして、良寛さんの弟子になっています。良寛さんと与板町は切っても切れない関係でした。三輪家からはもう一人、維馨尼という人が出家をしています。その人が徳昌寺の住職となった古範和尚のお弟子さんです。新潟ではそういう一家から何人もの出家者がでるといふのは、珍しくないんです。

古範和尚は一切経を徳昌寺に備えたいという、若い時から念願を持っていました。当時は一切経というと、京都の黄檗宗本山の萬福寺にある鉄眼版の一切経が一般的でした。古範和尚は、伊勢の松阪に行けば、鉄眼版の基になっている明の時代の明版一切経があるということを知ったのです。

明版の一切経は一万巻と、膨大な量であつて、代金が二二〇両です。これをなんとかして求めたい。文政元年、一八一八年の一〇月に弟子二人を連れて出発し、内金五〇両を松阪の商人に納めて一切経を買いました。

全部は持って帰れないので、その一部を自分とお弟子で持って徳昌寺に帰ってきました。この二ヶ月の長旅を事細かに漢文と漢詩、和歌で一冊に纏めたのが『請藏南行爛葛藤』という本です。

これは文政年間に出版されましたが、ここにあるのは昭和五年に作られた複製版です。これを見ますと、古範和尚だけでなく、沢山の人がお祝いの言葉を述べたり、漢詩を作つてこれを称えたり、様々のことが載っております。良寛さんの詩もあります。漢学者としてまた書家として当代一流の亀田鵬斎という人や、大乘寺住職の無学愚禪という有名な人が、続々と文章を寄せています。序文を書いているのは古範和尚が修行をし



「明版 一切経」と「請藏南行爛葛藤」

た雲洞
庵の祥
水和尚
です。
古範
和尚が
如何に
多くの
一級の
人々と

の付き合いが広くて、優れた人であったかということが良く分かるわけです。この本の名前は「一切経を求めて南の伊勢松阪まで行った詩と文章である」という意味です。

古範和尚は一切経を求めて出発する時に「み仏の教えの巻を尋ねんと伊勢路はるかに思ひたちぬる」という短歌を作っています。そういうことで、新潟では古範和尚のことを「北国の玄奘三蔵」と呼んでいるんです。

しかし、この一切経の代金の残りの一七〇両の工面が出来ない。調達に奔走するんですが、どうしてもこの大金を調達出来ないで困っていました。

三輪家から古範和尚の弟子となった維馨尼さんは、江戸まで行って資金集めをやっているんです。それでも間に合わない。良寛さんはその時、維馨尼さんに対して「君蔵経を求めんと欲し、遠く故縁の地を離る、ああ吾何をか道わん、天寒し自愛せよ」、自分は何も出来ないけれど、身体をいとうて下さいという励ましの詩を贈っています。

困っていたところ、お施主さんが現れました。与板と出雲崎の丁度中間にある島崎村の木村元右衛門さんという、代々、仏教信仰の厚い篤信家の家です。後に良寛さんが身を寄

せる家です。

木村さんに、古範和尚が困っているということで、たぶん良寛さんを通じて借金を申し込みました。古範和尚が返せない時は、一切経を全部お譲りします、という約束のもとに残りの一七〇両を借りました。そして無事、一切経が徳昌寺に揃ったんです。ところが、それから又、木村家への借金の返済に東奔西走しましたが、どうしても返せない。約束通り木村家に一切経を渡すことになりました。その時に良寛さんが口を利いたのです。

「木村さん、あなたの家に一切経があっても、しょうがないじゃないか。お寺さんにあるのはじめて、お経の威力が発揮されるんだ。あなたは仏教信仰の厚い方なんだ。この時こそ、乾坤一擲、一切経を徳昌寺に寄付しちゃうたらどうかね」

良寛さんと木村さんとは昵懇の間柄だったんです。これが功を奏して、一切経は徳昌寺に納まりました。

木村さんの一切経の奉納を喜んで、良寛さんは二首の短歌を作りました。その一つは「あさもよし君が心の誠ゆも経はみ寺に帰るなりけり」

今もこの歌が木村家に大切に保存されている



徳昌寺の境内

るそうです。

文政

七年、

古範さ

んは徳

昌寺で

六〇歳

で亡く

なられ

ます。現在、徳昌寺の山門を上った左手の奥の方に経蔵が建っていて、そこに明版の一切経が保存されています。古範さんが亡くなった二年後に、良寛さんは木村家に身を寄せることになるわけです。

木村元右衛門さんという人は偉い人で、良寛さんの身柄を七〇歳になって引取るのですが、それだけでなく、新たに自分が本当に一切経を菩提寺へ奉納したいと、今度は鉄眼版の一切経を購入しました。菩提寺は降泉寺という寺です。これは浄土宗のお寺だそうです。やはり何百両としたと思います。この時、良寛さんの祝い文の一二三文字の漢文が楷書できちんとした字で書かれており、これは石にも刻まれて降泉寺の経蔵の前に立っております。

天保二年、一八三二年に良寛さんは木村家で七四歳の生涯を閉じたのでありますが、葬儀には徳昌寺の次の住職であります二七代大機和尚が、導師を勤めたんです。

良寛さんと大機和尚は昵懇の間柄で、早く死んだら残った方が導師を務めるという約束をしたんだそうです。良寛さんが先に亡くなったので、大機和尚が導師を務めたということです。良寛さんが亡くなった時、木村家から葬儀場まで参拝者が途切れることがなかったところか、繋がっちゃったというのです。

この大機和尚が持つておりました十六善神の軸がこれです。これがどうしてここにあるのかといいますと、龍泉院の二七代目の住職、私は三二代ですが、明治元年から二五年まで住職をしているんですが、この方は徳昌寺で立職という儀式をあげました。

徳昌寺は修行道場ですから、そこで第一座の法戦式をやって、立職という式をあげました。その記念にこの軸を貰ったんです。この裏書に、大機和尚がこの軸を天保一三年四月一二日に、百疋で購入したと書かれております。

徳昌寺と龍泉院の繋がりはそれだけじゃなくて、次の徳昌寺の二八代が虎雲和尚ですが、

この方の頂像も龍泉院にあります。また、三一代の仙龍和尚は、龍泉院二七代の浄心和尚の求めによって、龍泉院の額と天徳山の額を二枚書いてくれました。明治一年に染谷小兵衛さんが浄財を出してくれまして、昭和五七年まで架かっていた龍泉院の額がそれなんです。昨年まで架かっておりました天徳山の額は明治三〇年に作ったものです。横浜で岩崎家という商家を興した山口平三郎さんに作っていただきました。仏教の信仰ということで、見えない糸で繋がっています。北国の玄奘三蔵、古範和尚のお話でした。

(記録・添田昌弘)

上山二〇年

柏市 添田昌弘

二〇〇六年の成道会に於いて椎名老師から参禅二〇年のお祝いの大額を頂きました。ご老師直筆の力強い揮毫で大変立派なものです。感激しました。しかし、私にとって二〇年間、あまり休みもしないで参禅してきましたが、何となく過ぎて来ただけのことで、とても頂くに相応しいのか、資格があるのか、面映い思いがするばかりです。

頂戴した額は「青山歩」です。二〇〇六年



「青山歩」の額をいただいた添田さん

たのです。

体力の減退を感じながら、数年前からは膝を痛め、百の山に登れるのか焦燥の念を抱きながらの登山でした。

「日本百名山」を著した深田久弥は「天氣の良い日に山に登って、それでも尚山が好きになれなかったら、それはよほど頑固者か神に見放された人である」と、言っております。

全身汗をかきながら息をはずませて山径を登る。両手両足を使い這い登る、鎖を掴む、岩に足をかけて身体を持ち上げる、かんかん照りの尾根を足元を見て歩く。立ち止まると空気が冷たい。山頂に腰を下ろす。遠くの峰々、ハイマツを渡る風の音、雲海が湧き上がる。そんな時、道元禪師のお歌を呟く。

「峰の色谷の響も皆ながら吾が釈迦牟尼の声と姿と」

二〇〇六年は私にとって大きな節目の年となりました。六月に古希を迎えました。八月に百名山を登り終えました。十一月に参禅会発足三五周年の行事に参加することができました。そして参禅二〇年のお祝いです。

「青山歩」は『普燈録』にある芙蓉道楷和尚の「青山常運歩」の言葉です。道楷和尚は中国曹洞宗の第八世の方です。

額を頂いてすぐ、何年か前、道元禪師の『正法眼蔵』「山水経の巻」のご提唱を思い出して、読み返すことにしました。『明珠』四〇号（平成一六年四月号）の中寫宏誠さんの書いたものを拝見しますと、「山水経」のご提唱は昭和六二年二月から翌年二月までのご提唱のようでした。つい最近のことと思っていましたが、私が坐禪を始めて間もなくのことでした。

「山水経の巻」は「而今の山水は古仏の道現成なり」素晴らしいお言葉で始まる巻です。読みすすむとすぐ、「太陽山楷和尚、示衆云、青山常運歩」とあるのを見つけました。

増谷文雄先生の『現代語訳正法眼蔵』を見ると、「山はつねにあらゆる功德をそなえて

いる。そのゆえに、つねに安住し、またつねに歩くのである。その運歩のいとなみをつまびらかに学ぶがよい。山が歩くといっても、それは人間が歩くのとはちがう。だが人間が歩くのとおなじでないからとて、山の歩くことを疑ってはならない」「もし山の運歩を疑いのであれば」と書いてあります。

山は歩きつづけている。私も、後をついていくことにしよう。

静かなる山頂に坐し雲の峰

昌弘

年番幹事を終えて

葛飾区 富澤 勇

新年会の折、五十嵐さんから年番幹事の感想を『明珠』に掲載しますからと原稿提出を求められ、さて困りました。年番幹事は、杉浦さんが主に努められ、私は補助として会計や雑事のお手伝いを行ったに過ぎません。

たまたま平成一八年は、龍泉院参禅会発足三五周年の記念すべき年に当たり、記念行事等が重なり、杉浦さんは、大変ご苦労をなさったことと思います。大乗寺、道元禪師祖蹟巡礼の旅の折、杉浦さんが寺院の入場券を求める際などに、進んでお手伝いができないな

ど、何事にも気の利かない私は、恥ずかしい思いを残してしまい反省しております。

さて、今思うに、年番幹事の仕事で、一番印象に残っている仕事は、ご老師様の提唱の前に木版を叩くお役です。板を打つ単純な仕事ですが中々難しいのです。槌が開講板と直角に水平に当たるよう打ち、槌が跳ね返ると良い反響音が出るのですが、中々木版に槌が水平に当たらないのです。均等に同じ響きを繰り返すことが非常に難しいのです。

また、間の取り方や強弱の加減が難しいのです。自分の感覚で間において槌を打っていますが、間の取り方が判らないのです。均等に間において木版を打つたつもりですが、皆様にいかが聞こえていたでしょうか。

冬場になりますと、二炷の坐禪を終え、本堂の後片付けを済まし、開講板を打つ頃は、体が冷えトイレに行きたいのですが、我慢して木版に向かうのです。これが年番幹事をしている一番の苦行でした。大げさですが脂汗を搾るほどです。心頭を滅却し尿意を忘れ、木版を打ち鳴らし、終わるとトイレに駆け込んでおりました。笑い話としてお聞き捨てください。

さて、皆様は、木版の響きを「生死事大無

常迅速」の音と聞こえていましたでしょうか。今度は、年番幹事を終え、ゆつくりと木版の響きを聞きたいと思っています。

年番幹事によせて

我孫子市 小畑二郎

小山さんと一緒に今年の年番幹事を仰せつかりました小畑二郎です。とはいえ、本年最初の参禅会と二月の新年会の会計処理をしただけで、これといって幹事らしい仕事はまだしていません。小畑代表幹事とは同姓で、こちらから勝手に父（兄）のように慕っておりますが、実の親戚ではありません。

四年前に始めて参禅し、ご指導を受けたときには、愚息とともに一度坐禅を体験してみようかというような、安易な気持ちだったことを反省しております。

それまでの私は、書物を通じて仏教のことについて、ほんの少し知ってはいたものの、信仰としての坐禅とはおよそ無縁な生活を送ってきました。ただ、今になって思い返せば、高校の修学旅行の道筋で永平寺を見学し、青年僧のさわやかな人柄とお話に新鮮な感動を覚えたことが、その後かなり経ってから、自らの生活態度や人生観を転換する伏線となっ

ています。また偶然にも、大学院時代の下宿が本郷駒込の吉祥寺の裏手にあり、仏道に触れる機会が僅かですがありました。

こんな私でも、ありがたいご縁によって、「石の上にも三年」、今では、朝の坐禅を日課とし、月一度の参禅会を楽しみにするようになりました。これも一重に、ご老師や諸先輩方のお導きによるものと深く感謝しております。そのようなご恩に報いるためにも、不束なものです。この一年間精一杯お勤めさせていただきますので、よろしくお願いします。

ところで、二月の新年会はとても和やかな楽しい会になりました。たしか「不酤酒戒」という戒律が、何かの教えの一つにあったのではないかと思いますが、度を過ぎなければよろしいというお許しに安堵しました。自由にものを言える雰囲気について調子に乗ってしまい、誤解を招くことを喋ったかもしれないと心配しています。

最後に一言、私事に関する抱負を述べさせていただきます。私はこれまで長年にわたって西洋流の経済学を研究してまいりましたが、残りの人生の課題として、経済学と仏道の実践とを結合させることを、この参禅会を通じて密かに抱くようになりました。

とはいえ、まだまだこの二つのことは容易に結びついてきません。しかし、経済学はもとと、倫理的な存在である人間の生々しい行為に関する内省から出発した、「道徳科学」であります。その点で、「自己ならふというは、自己をわする、なり。自己をわする、といふは、万法に証せられる、なり。」をお示しになられた道元禅師の教えから、多くのことを学ぶことができるのではないかと、思い巡らしているところす。

年番幹事を務めるに当たって

鎌ヶ谷市 小山 齊

杉浦さんから今年の年番幹事の依頼があり、簡単に引き受けた。帰りの車の中で「あれ」と自分を振り返った。今までなら断っていただろう。なぜ、すんなりと引き受けたのかな。十一月の大乗寺、道元禅師祖蹟巡礼の旅先でも、「小畑さんと二人で年番幹事を」と話が出て、素直に受けた。

引き受けておきながら、新年早々の一月参禅会、新年会を欠席し、小畑さんはじめ、皆様に大変迷惑をかけてしまった。また、二月の参禅会は今までより早く伺ったが、既に、数人の方が参禅会の準備を始めており、幹事

の出番がなかった。おろおろしていると、大坂さんの奥様から「のんびりしていればいいのよ」とアドバイスを頂く。

二月十九日、坂東三十三観音巡礼を結願した。千手観音菩薩に手を合わせ、長かった三年間の巡礼を振り返る。いろいろな出来事が脳裏をかすめる。激動の三年だった。観音様のお助け、お導きか。

これから、皆様にいろいろと教わりながら年番幹事を務めていこう。水の流れるままに、自然体で務めようと思っている。

よろしくお願いします。

『口宣』〈九号〉

流山市 中嘉宏誠

此処、龍泉院では坐禅の初めに椎名老師の『口宣』があります。

昭和五八年上山以来二〇年余、『口宣』を伺って参りましたが、ある時、椎名老師の『口宣』を伺うだけではもったいないと思い、録音を始めました。この時は、二年がかりで『口宣』の一二本のテープ起こしをし、椎名老師にお見せしました。

椎名老師は快く日を通してくださり、平成

一〇年月例参禅会『口宣』と表題を付けてくださいました。道友の石田七重さんが、自ら進んで毛筆で『口宣』の表紙・タイトルと仏画を書いてくださり、立派な『口宣』となりました。

以来、椎名老師のご指導を賜り、石田さんのご協力を得て、本年「平成一八年月例参禅会『口宣』〈九号〉」の発行となり、達磨大師の「面壁九歳」と肩を並べるに至りました。『口宣』のテープ起こしに当っては、『正法眼蔵』、『正法眼蔵随聞記』、『良寛詩集』、『禅学大辞典』等に触れ、勉強の機会を得ましたことに感謝いたしております。



創刊号から九号まで揃った口宣

改め
て、椎
名老師
のご指
導に厚
くお礼
申し上げ
ます。
合掌

『口宣』との出会い

ふじみ野市 石田七重

初めての『口宣』を手にした時、表紙の大きな活字の『口宣』という文字を拝見して、何となく硬い感じで難しそうに思いました。表紙を開きますと、毎月の坐禅冒頭の椎名老師の『口宣』でした。参禅会の中嘉宏誠さんが録音、テープ起こしをされて、冊子に纏められたものでした。

椎名老師のお話そのまゝ、が活字になっていて、ご老師のお声が聞こえてくるような親しさで、難しい内容が易しく語られていました。これは表紙が活字でない方が親しさ、温もりが伝わるのではない方が親しさ、温もりがせて頂き中嘉宏誠さんにお見せしました。ご覧になった中嘉宏誠さんから毎月のタイトルも、というご意見があり、筆を持つことが好きな私は有難い勉強の機会と、書かせて頂いて来ました。

龍泉院で皆様と一緒に坐りたい、ご老師のご提唱を拝聴したい、という思いと、遠方なのでいつも今回事りという思いの中で今日まで参りましたが、『口宣』のお手伝いという場を頂きました事、身に余る光栄に存じます。

『口宣』の発行は例年、年頭の参禅日です
ので、この数年は『口宣』の揮毫が私の書初
となって居ります。そしていつの間にかへ九
号となり歳月の重みを感じて居ります。
そこで九年前のことを想い起こし、拙文を
書かせて頂きました。

参禅させて頂き、椎名老師によって仏道に
出会ひ、参禅会の皆様方の温かいお心に接す
ることが出来ました事、『口宣』に出会いま
した事、尊い仏縁に改めて感謝の念を深くし
て居ります。

合掌

受身は起ち上がる原動力

我孫子市 清水秀男

「受身」で思い出すのは柔道のことです。
初心者から柔道を習う時にはまず「受身」の練
習からが基本の様です。事実、国士舘大学体
育学部 の齊藤仁助教授（柔道全日本男子監
督）の柔道実習の科目の内容をみると、三〇
回の実習のうち、最初の二回は目的、歴史、
礼法、基本姿勢、組み方等ですが、その後、
具体的な技の実習に入る前に、実に五回が「受
身」の実習に割かれています。これは如何に
柔道では「受身」がすべての基本であるかを

示していると思います。

私は、柔道のことは門外漢で分りませんが、
「受身」を修得するのは、まず上手に転ぶ術
を会得しないと大怪我をするからだという意
味は勿論あると思いますが、真の「技」を完
成させるには、「受身」が肉体的にも精神的
にも基礎で、かつ太い根っこの部分に相当す
るのだと想像されます。

柔道で投げ飛ばされることは、負けを意味
します。「受身」を最初に学ぶということは、
早くから格好よく勝つことを覚えるな、まず
素直に投げ飛ばされて、人前で叩きつけられ、
ぶざまに恥をさらし、いさぎよく、真剣に、
負けることをうんと沢山覚えろ。そしてそれ
に対応する術として素直に「受身」を学べ。
「受身」を会得すれば、投げ飛ばされてもダ
メージを最小限にして、すぐ立ち上がること
が出来、直ちに攻撃に転ずることが出来る。

従って、投げられて負ける体験をし、それ
から如何に早く対応して次の行動に出るかとい
う道を会得出来てはじめて、相手を投げて
勝つことの内容も技も本物になる。その繰り返し
が結果として、自分の技のみならず、自
分自身を完成度の高いものにしてゆくのでは
ないでしょうか。これがまさに「受身」の極

意であり「柔道」なのでしょうか。

これを人生の諸事象に当てはめるとどうな
るでしょうか。

自分の人生において、格好よく勝ったり成
功することよりも、情けない程にぶざまに、
だらしなく、つまずいたり、倒れたり、失敗
したり、傷ついたり、負けたりする方がずつ
と多いのではないのでしょうか。

ある中国の昔の修行僧が師匠に尋ねました。
「この道さえ歩んでゆけば、間違いない真
実の道は何でしょうか」

師匠曰く「七転八倒」（ころんだり、倒
れたり、失敗するのが真実の道である）

人生という道において、安定した、平坦な、
真つ直ぐな道はない。山有り谷有り落とし穴
ありである。それをどう変えることも出来な
い。それを所与のものとして、自分が理想と
するもの対して、どう真剣に向き合って、結
果を問わず、如何にひたむきに努力してゆく
かで、その人の人生が決まってくるというこ
とでしょうか。

本当に人生の修羅場をくぐりぬけて来た人
の生活、風貌、言動には温かみ、優しさや味
があります。きつと下積みや下働きの苦しみ
や人生の悲しみをたっぷり味われ、それにめ

げることなく、執着することなく、転んでもすぐその場で起きあがる。負けてもすぐ立ち直る。失敗してもいち早く体制を立て直して次の目標に向って挑戦してゆくことを何度も何度も繰り返し続けた結果だと思っています。

従って、人の苦しみや悲しみを心から理解できる優しさ、暖かさや思いやりがあるのだと想います。いわば、その人は、「受身」の極意を真の意味で体得された人なのだと思います。

青山俊董老師がよく引用される歌に「投げられたところで起きる小法師かな」があります。じつくり味わいたい言葉です。

曹洞宗「歳末助け合い」に参加して

柏市 加藤 孝

昨年十二月一日、師走でにぎわう柏駅東口デッキで行われた年末恒例の「助け合い」托鉢に参加させて頂いた。

午後一時に長全寺本堂で般若心経一卷を誦して出発。初めての体験ではあるが椎名老師、杉浦さん、五十嵐さん等がおられるので心強い。とは言いながらも、この先如何様な出会いがあるのか、多分、多くの人達から奇



可愛い手から喜捨を受ける

よう・・・等々、不安を抱きつつ行列の中について行った。

日ごろ見慣れたそごうの前、老若男女が足繁く行き交う。他のグループがマイクのボリウムを上げ呼びかける騒音。暖冬とはいえ、日陰を通り抜けるビル風は寒く、身に沁みる。修行の一環のつもりで参加したが、とてもその心境にはなれなかった。

私は慈本寺様の傍に立ち、杉浦さん作製の浄財箱を首から下げ、右手に「歳末助け合い」の幟を持ち、直立して只管ご喜捨を待つ。

初めに頂いたのは女子中学生らしい二人連れ。ジャンケンをしている。どうやら負けた子が出すようだ。浄財箱に百円入れてくれたが、勝った子も三〇〇円入れてくれた。二人

は爽やかな笑顔を残して雑踏の中に消えていった。

私の前に行く、いかにも身形（みなり）は“金持ち”のような紳士淑女達。私など一瞥もしない人、あるいは、この忙しい時に何をしているのかと、我々を偽善者のような目で眺めて通り過ぎる。

然し中には、行き過ぎた後引き返し、すみません、これだけしか有りません、受け取ってください”と二〇円入れてくれた御婦人。私は、思わず胸が熱くなった。あの紳士淑女達とこの御婦人との落差、戴いた二〇円は値千金に思え、心からお礼の会釈をした。

また更に、普段、好印象を抱けない茶髪の若者、真っ赤に染めた髪の少女も“頑張ってください”と声をかけて喜捨してくれ、日本の若者もまんざら捨てたものではないという思いをした。

更に印象的だったのは、五、六歳と思しき子供に千円札を渡し、遠くから見守っていた若い母親。これ以上の活きた教育が他にあらうかと考えさせられた。

約三時間の体験を通じて感じたことは、金銭の持つ“重み・価値”であった。

他人様から頂く一〇円、二〇円が如何に有

り難いか、また大変な事か、また一〇円も一万円も喜捨という行為においては多でもなく少でもない、同等に価値がある。

真に価値有る事は、我を顧みず自分で出来る範囲の事を、他のために実践行為するそのものに在るのではなからうか、即ち「利他行」である。

私の前を通り過ぎて行った人々の中には喜捨したい、自分も助け合いの輪の中に入りたいと一瞬考えた人も沢山いたと思うが、その思いを実践するか否かにより「利己」と「利他」に分かれるのだろう。

三時間以上立ち尽くしたため下半身感覚が鈍くなったが、人を観る目は幾らか鋭敏になったような気がした。これもこの行に参加させて頂いた功德であったと感謝している。

・人を身形で判断するな

・“..したい”から“..する”事で利他

行は完結する

・金銭に絶対的価値はない、あるのはそれを如何に使うかである

得がたい体験をさせて頂き、機会があればまた参加したいと感謝しつつ帰路についた。

合掌

ハーフマラソン

柏市 相澤 善彦

平成一九年二月四日(日) 天候 晴れ 北北西の風強し。ここは、茨城県守谷市役所前、午前一〇時ちょうどにスタートした。いよいよこれから長い長い二一・〇九八kmの苦しい旅が始まる。

私のゼッケンは一五一九番、五〇歳から五四歳のクラスからのエントリーである。参加者は見たところ二千人ほどと思われる。

スタートラインには招待選手として、あの箱根駅伝を走った中央学院大学駅伝部の、いかにも早そうな面々が陣を張っている。私の位置は中段のやや後方、まわりには男女を問わず、年齢を問わず、体形を問わずの人達で一杯である。

このコースはスタートとゴールが同市役所付近であり、折り返し地点を頂点としたループ状の形態となっている。例年は五kmのレースに参加していたが、昨年の秋の手賀沼ハーフへの参加がきっかけで、こちらもハーフへ参加することになった。

五km、一〇kmはスプリントであり、まったく競技的スピードの中に身を置くことになり、

泡を吹いての力走を要求される。従って、五kmのレースでは楽しんだりしている暇など無いと感じていたが、手賀沼のハーフでは景色を見ながら、自分と対話をしながらの走りが出来たのである。

しかし、今回に限っては非常に辛い対話となった。

スタートから三km付近までは、身体を温めて各部のコンディションの確認や息を整えるのに費やし、五km付近から徐々にスピードアップの走りとした。

ここから先はこのコース初めての走りであり、登り登りの連続に出くわし、足は張るは、息は上がるはと難儀してしまった。どうにかリズムを取り戻し、折り返し地点の一〇kmまでは比較的良いペースに戻すことが出来た。だが、もう復路の心配が頭をよぎってきたのである。

先ほどの登りでこんな光景を見たことをここで紹介しておきたい。登りを私と並走していた男性(六〇代と思われる)との問を、丁寧な手刀を切って割って入ってきた男性(やはり六〇代と思われる)が我々を轢わして前へ出たところ、抜かれた男性がまた抜き返した、するとまた手刀の男性が抜き返した。二

度三度とやっていたが、登りきったところには、私から随分と遅れていたようである。そのまま潰れてしまったのではないかと思う。

あの二人は知り合いなのか？他人なのか？あの年代は怖いなーと感じた次第である。「他人に勝つよりも、まず自分に」と考えていた。だきたいものである。

残り五kmまでやって来た、頭と肺はしっかりと機能しているが、折り返し地点からここまでは北風が向かい風となり、足が悲鳴を上げ始めている。道端には、足を引きずり歩いている人などが始めている。ハーフはここからがきつく、また我慢張りの勝負どころである。

「さあ、相澤これからどう走る」と自分に問いかけました。「完走だけはするぞ、ゆっくりになっても最後まで行こうよ！」と。しかし足は鉛のように重たくなってきた。残り二km付近、家内の姿が見えてきた、手を振っている。いいところを見せたいが、無理は出来ない。「作り笑い」がせーいっばい。

残り一・二km、自分に「ホームをチェック、腕を振り、ゆっくりでもゴールだ！」とふたたび言い聞かせ、何とかゴール。そのまま倒れ込んで身動き一つ出来なかった。

しかしどういう事か、何とタイムがすごい、手賀沼の記録を一〇分以上も短縮していた。今日はだめだと思っていた、あの辛さや足の動きからして、予想外である。

家内をはじめ応援していただいた皆さんに、感謝の気持ちでいっぱいとなった。正直に嬉しい気持ちが溢れて来た。

「走る」と「坐る」は動と静のように、正反對を表すかのように思えるかもしれないが、「一心不乱」に打ち込む「姿と気」には、動と静の違いは無くなるのではないだろうか。今回のハーフでは「走り」の中に、しばしの「無」の境地の存在を感じられたように思えた次第である。

追記

今回のタイム 一時間四四分五〇秒（平均時速一一・五km程度）

所属 聖徳A.C（アスリートクラブ）副会長を務めさせていただいております

ゴール後受けた会員からの完走の祝福に再び感動し、「ありがたいものである」とつくづく感じました。

Ⅱ NHK文化センター柏教室Ⅱ 椎名老師の講義始まる

去る一月二〇日より、柏駅前にあるNHK文化センター柏教室において、椎名老師が講師をお勤めになられる『正法眼蔵随聞記』と坐禅」がスタートしました。

一月、三月までの第一・第三土曜日の全五回が一クールとなっております。

受講時間は午前一〇時～正午までの二時間。『正法眼蔵随聞記』の講義を拝聴した後、坐禅を一炷行います。

龍泉院参禅会からは、石田さん、軍地さん、杉浦の三名が参加しております。

他の受講者から、椎名老師の講義内容は素晴らしいという絶賛の声を聞くたびに、私たちは鼻を高くしています。

次の一クールは、四月～六月です。興味のある方は左記へお問い合わせください。

連絡先電話：〇四一七一一四八―二七一一

（NHK文化センター）

（記録・杉浦上太郎）

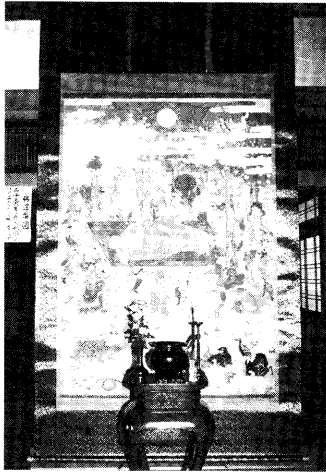
梅花講と参禅会のコラボレーション による涅槃会、厳修す

去る二月一日、午後一時から、龍泉院様の本堂において、涅槃会が肅々と挙行されました。涅槃会とは、お釈迦様が入滅した日に因んで、釈迦の遺徳追慕と報恩のための法要を奉行する、仏門の大きな行事です。

本堂には、お釈迦様が涅槃に入られた情景を描いた、大きな掛軸が掛けられていました。因みにこの掛軸は、正徳五年（一七二五年）に浅草の絵師によって描かれたものとの由。

導師の椎名老師、梅花講員一五名、参禅会員七名の合計二三名によって、法要が肅々と執り行なわれました。法要式典の配役は、小畑代表幹事以下の参禅会員です。

法要の開始は梅花講の方々から、釈尊涅槃



龍泉院所蔵 仏涅槃図

に由来する曲目が、涼やかに奉詠されました。法要の後は、椎名老師より、釈尊涅槃に因んだ法話を賜りました。

一服お茶を喫した後、参禅会員は報恩感謝の坐禅を一炷させていただきました。帰りには無病息災で過ごせるといふありがたいご利益涅槃団子を、お土産に頂戴いたしました。

涅槃会には、参禅会として初めての参加でありましたが、このような行事に参加させていただくことにより、釈尊への感謝と、脚下照顧して、新たな精進を誓う動機付けとなることでありましょう。

梅花講とのコラボレーションは、感動を倍加させてくれました。この良き日を機会に、さらに精進に勤めたいものであります。

（記録・杉浦上太郎）

大いに盛り上がった新年会

今年も恒例の新年会を、二月四日午後二時より、例年の木曾路から鯛料理の「てらや」に場所を変えて、開催されました。

最初に椎名老師からご挨拶があり、昨年の参禅会三五周年の行事全体が見事に執り行われ、中でも「大乘寺、道元禪師祖蹟巡礼の旅」に、会員多数の参加を得て無事終了でき、参

禅会各位に感謝申し上げますとともに、四〇周年に向けて、各位のさらなるご健勝・ご精進を祈念されるところのお言葉がありました。

そして、今年の一月参禅会に揃って発刊された『明珠・三五周年記念号』と『口宣』に對して、その内容は誇るべきものである旨、関係された方々の労を深くねぎらわれました。

ご老師のご挨拶の後、歓談に入り、美味しい酒肴や手打ち蕎麦に舌鼓を打ちつつ、参加者から、人生の思いや、参禅に関わる貴重な所見を多くいただき、和やかな雰囲気のうち、今年の新年会を閉じることとなりました。

なおその際、小畑節朗代表幹事からのお年玉として、椎名宏雄老師による公開講演「禅門の修行のかたちと変遷」（二〇〇一年一月三〇日、駒澤短期大学佛教論集第七號・抜刷冊子）が参加者全員に配られました。

この冊子を拝読しますと、唐代の禅の修行形態における「坐禅」・「作務」・「偏参」などについて、詳しく分かり易く述べられており、現在の日本ではこのような修行が疎かになっているのではないかと、問題提起されています。私も参禅を志す者にとって、大いに考えさせられる冊子であります。

（記録・松井隆）

訂正とお詫び

沼南雜記

前号の明珠四六号の一八頁に掲載されてしまった石田さんのお歌「早朝に円山公園内ゆくに禅師茶毘搭密と静もる」を静しと間違ひ、石田さんには大変失礼いたしました。まことに申し訳ありません。謹んでお詫び申し上げます。今後このような校正ミスのないように努める所存です。

参禅会記録（一）内は座談の司会者

平成一八年

●九月二十四日

三八名

（寺田 哲朗氏）

●一〇月二三日

三四名

（宮本 茂氏）

●十一月二・三日

二二名

参禅会三五周年記念行事

金沢・大乘寺と京都・道元

禅師祖蹟巡礼の旅

平成一九年

●一月二八日

三二名

（永野 昭治氏）

●二月四日

一二名

新年会

於「てらや」

幹事 小畑 節朗氏

小畑 二郎氏

●二月一五日

三三名

涅槃会

於 天徳山龍泉院

幹事 小畑 節朗氏

●二月二五日

三一名

（永野 昭治氏）

▼今号は参禅会発足三五周年記念行事として行われた、成道会前日の一夜接心を中心に特集を組みました。三五周年記念号を一月二六日（道元禅師御誕生日）に発行したばかりなので、寄稿して下さい

た方々には大変ご足労をおかけしました。改めて御礼申し上げます。

▼大乘寺東隆眞老師のご提唱を特集した『明珠』四六号を大乘寺さまへお送りした所、明珠編集部に山主東隆眞老師さまご自身からご丁寧なお礼のお手紙をいただきました。編集部一同感激しています。

▼年番幹事が杉浦上太郎・富澤勇両氏から小山斉・小畑二郎両氏に変わりました。杉浦・富澤さん一年間ご苦勞様でした。小山・小畑さんよろしくお願いいたします。

年番幹事の小畑さんは代表幹事の小畑さんと間違えないよう、参禅会では「二郎さん」とお呼びしてほしいそうです。（秀嗣）

▼二月一五日に龍泉院で涅槃会が行われました。私にとっては初めて、仏涅槃図の本物を拝見致しました。涅槃図子という甘さおさえの美味しい団子も頂きました。歳時記で涅槃会を見ましたら、次のような素晴らしい句が載っていましたので、ご紹介します。

土不踏ゆたかに涅槃し給へり

川端 茅舎
上田 五千石
平畑 静塔
（昌徳）

龍泉院参禅会簡介

一、日時

毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、坐禅

第一炷 口宣、坐禅三〇分
第二炷 坐禅三〇分

一、講義

木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』の提唱を聞く。現在「三昧王三昧」の巻

一、座談

自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、参加資格

年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、会費

無料

一、一夜接心

六月上旬（本年は六月九・一〇日）一泊し、七炷の坐禅とご提唱を聞く

一、成道会坐禅

月例参禅会その他に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月二日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴取、点心を共にする